

再び「一衣帯水」——あとがきに代えて

先だって新聞をみていたら四段抜きの「中日両国は一衣帯水」（共にぬれる）とあるのをみて、ちょっと驚いた。副見出しが「にこやかにへ中国展」開幕」とあり、大阪中国展の模様を報じたものであった。ところが中身を読んで二度びっくり、というよりふうむと思ったことがあるが、それは中国展覽団李永亨の開幕あいさつのことばであって、「中日両国は一衣帯水の隣邦であり、二千年余りの友好往来と文化交流の歴史を持っている」といっているのである。

「一衣帯水」は戦後の日本では、「同文同種」（同じ系譜）「しんし脣齒輔車」（互いに補う）等と共に戦犯的イメージを持ったことばとしてある。日本帝国主義は如何にも友邦的表情でこれらのことばを盛んに連発して、結局は中国侵略のスローガンの存在にしまったのである。だから戦後にこのことばを批判するものはあっても、肯定的に使う人はほとんどいなかった。それがこうやって当の侵略された中国人の側で使われたことを意外に感じると共に、なにがしか

の納得もあったのである。

戦後、世界的な民族主義の流行から、自分の国と他の国とを区別することが、すっかり定着してしまっただけのようにみえる。確かに中国と日本とは文も種もまるで異なる。それを「同文同種」といったところに政治的意図が隠されていた。文や種ばかりでなく、実際の地についてみると、色も音も匂いもまるで違うという感じがある。自転車や車のクラクションの音一つとってみても、日本のに比べていくらか音程が高い感じがする。まして思索の仕方、社交の方法において異なるのは当然である。しかし（そのことによる相手国の認識は高まったとしても）同時に次第に薄れていったのは、海を越えてつながりあう連帯感ではなかるうか。昔も今も日本人の中国認識はうといのであるが、戦後の国交断絶関係において、ことに中国の外国の観念（無知）のバターンができ上がってしまったようである。それが中国の側から「一衣帯水」ということばで、つと手が差し出された。中国の強烈な民族主義の中には、そうした国際性もまた含まれているのである。しかしこちら側からも、自分の納得ゆく中国のどの部分かにコミットするべきであろう。それはとりもなおさず、コミットした部分以外の中国との争いになるかもしれないが、そのことでむしろ連帯の証しになるようにつながらねばならない。私にはそう思えたのである。

いみじくも私は中国で、妙な国際連帯を体験することができた。確か広東のことであつたが、二、三の小学生在がいて話しかけたところすぐに日本人とわかってくれた。「何故わかるのか」というと、「洋服を着ているから」という。「顔は——」という、「顔は同じだ」と答えた。なるほど子供の眼でみれば、衣がなければ日本人も中国人も同じなのである。こんな調子で両国が共に歩めばいいのだ——。

おわりにこの稿について記すと、このささやかな本が生れるにあたって三人の方に感謝せねばならない。私を中国に接しさせて下さった竹内好先生。編集部の三角忠さん。特に三角さんには礼をいわねばならない。何しろ四年越しの約束を、今ようやく果たしたのであるから——。また、直接原稿については中国研究家の新島淳良さんにみていただいた。その意味ではこの本も、単に私一箇の本というより、意見の違いはあれ、連帯の産物なのである。

一九七四年七月十九日ひる記

玉川 信明

たまがわ のぶあき

1930年 富山県に生れる

1949年 富山県立中部高校卒業

著 書 『評伝辻潤』(三一書房)

『風俗越中売薬』(巧言出版)

訳 書 『毛沢東その青年時代』(至誠堂) 共訳他

現住所 富山市布目3470

中国 アナキズムの影

1974年 10 月 15 日 第1版第1刷発行

著 者 玉 川 信 明

©1974年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 誠和印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 0 3 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 826

0230-740826-2726

自衛隊

星野安三郎・林茂夫編

480

海外派兵、治安出動等自衛隊の核心問題に挑戦する！

自衛隊 この戦力

藤井治夫著

350

アジア最強の国軍、核武装化をも構想する衝撃の戦力

自衛隊の作戦計画

藤井治夫著

350

国家の最高機密たる用兵にはじめてメスを入れる労作

自衛隊と治安出兵

藤井治夫著

390

治安体制の確立をめざす自衛隊の恐るべき実態を語る

在日米軍

松本克美編

320

戦国体制下の基地の組織と状況、極東戦略の実態調査

第七艦隊

吉原公一郎著

290

米帝のアジア支配の「腕」第七艦隊、その動向と装備

米国軍隊は解体する 清水知久他著

350

世界最強の軍隊を根柢から揺さぶる就ような抵抗闘争

戦争と民衆

杉辺利英著

350

ベトナムの戦火のもとで生きるインドシナ民族の歴史

核戦争が起る

坂井定雄著

350

ついに核抑止論は破産した。恐るべき核軍拡の実態！

警視庁機動隊

大杉 宙著

320

無法の国民圧殺集団、その機構と隊員の赤裸な横顔！

催涙ガス

CM毒性研究グループ編

350

催涙性毒ガス、その科学的分析にふまえた治療と実態

三里塚

朝日ジャーナル編集部編

480

闘う農民のメッカ反権力の砦を鮮烈に描く成田の記録

闘う三里塚

朝日ジャーナル編集部編

350

北総台地に野火の如く燃えさかる不退転の闘いを描く

常東から三里塚へ

山口武秀著

350

既成農民運動を超え出る地域闘争の戦略と構図を語る

農業の危機と農民

長須祥行著

350

告発！農業と農民を追いつめるのが「近代化農政」か

農民は基地と闘う

青年と都市を結ぶ
青年の会編

390

長沼ミサイル基地設置反対闘争の全貌を現地から報告

誰か沖縄を知らないか

村瀬春樹著

350

語られるのみでは解答はない。沖縄、その距離は何か

沖縄 本土復帰の幻想

吉原公一郎編著

290

民族主義的路線の故に破綻した復帰運動をのりこえよ

沖縄教職員会

関 広延著

290

沖縄解放をめざす中核部隊、教職員会の組織と闘争！

全軍労反戦派

沖繩県
反戦青年委員会編

320

「革新勢力」への強烈な告発として登場した反戦労働者

沖縄奪還 '68-'70

波照間洋著

290

「一体化」政策の虚構をえぐり、闘いの指標を示す！

沖縄 この現実

石田郁夫著

260

返還を目前にした、最も白熱した闘いの現地をルポ！

安保・反戦・沖縄

石田郁夫著

320

70年代前哨戦の（熱いルポ）が拓かれた地平を突き出す

孤状列島の底点から

石田郁夫著

320

日本列島のあらゆる最底点から、その怨念を発掘する

毛沢東選集 1-9

1-9

毛沢東選集刊行会編訳／革命の星、毛沢東思想の真髓

連続革命と毛沢東思想

菅沼正久著

290

八億人民と文化大革命を指導した思想を根柢から探る

中国文化大革命

菅沼正久著

350

世界を震撼させた「文革」を具体的事実に基づいて分析

中国の現在と未来

浜 勝彦著

350

経済建設の独自性を解明し捉える中国革命の現段階！

毛沢東の政治

各務寮一著

250

現実政治を実証的に描き出し毛沢東路線の核心に迫る

毛沢東主義の幻想と現実

毛沢東批判論文

250

国際関係研究所編／ソビエトにおける毛沢東批判論文

台湾と蔣介石

楊 逸舟著

350

国民党政権に抹殺された一九四七年の武装反乱を報告

反安保の論理

具島兼三郎著

320

安保存続論をその基盤から粉砕する。反安保の必然性

日本共産党はどこへ行く 片山さとし著 480

宮本路線の誤謬と、その官僚的体質への壊滅的批判ノ

市民革命 小林良彰著 290

ブルジョア革命を権力と財政の面で考察する新現代史

べ平連 小田 実編 350

組織なき組織がくりひろげるその運動のエネルギーは

西ドイツ 永井清彦著 350

苦悩するドイツの政治・外交・社会・文化の諸相をみる

黒人は叛逆する 長田 衛著 230

黒人の解放闘争に死を賭けたマルコムXの思想と生涯

中南米の革命運動 鈴木一郎著 290

ベトナムに続く明日の歴史の焦点、第三世界の叫びノ

政府・自民党・財界 宮城正行著 390

安保体制派の癒着状況、支配メカニズムの実態を暴く

国家の秘密とは何か 高田茂登男著 350

行政府と司法界を支配する官僚的秘蔵主義の実態暴露

公安条例 東京護憲弁護団編 290

悪名高い弾圧法の効力と機能、撤廃闘争の方向を究明

憲法を考える 林 横子著 350

憲法の理念と実態を日常生活に即して追求する手引書

身のまわりの法律 梶原和夫著 250

生活をとりまくさまざまな法律問題の常識を詳説

脱税 倉石弘之著 320

脱税天国ニッポンに挑戦しその実態と責任を追求する

交際費 倉石弘之著 350

日本経済の「黒い大河」、交際費の税務会計学的分析ノ

税金作戦 広本直記著 290

「節税」の知識を面白くやさしく披露する痛快作戦論

税務署への告発状 高田茂登男著 350

税務官僚の悪手口と腐敗の実態を内側から暴く

実戦的経営法学入門 小林健男著 290

中堅社員にも労働者の活動家にも必須の法律知識を集成

賃銀論入門 新道直行者 300

原理論から現実の制度まで、賃金問題の総合的教科書

賃金問題の考え方 板東 慧著 350

賃金闘争の基本的命題をふまへ、問題の立て方を概説

革新の原点とはなにか 藤田若雄著 420

長船社研の闘いを教訓化しつつ展開する誓約者集団論

労働組合とはなにか 大森誠人著 450

公式的な解答を排し、現実の運動の中から答えを探る

労働組合と国民生活 河野 稜著 350

イタリア労働運動にみる労組と地域的課題の結びつき

大型合併と労働組合 倉野精三編著 320

産業再編はいかなる問題を労働者に投げかけているか

トロツキー——労働組合論 浦田伸一編訳 420

帝国主義時代における労働組合の戦略・戦術を解明ノ

新版 大衆活動 李光燦著・山口一郎訳 300

大衆運動の指導のあり方を毛沢東思想にもとづき解明

反体制労働運動とはなにか 松葉武雄他著 320

七〇年代労働運動の方向性をその原点的把握から提起

現代労働運動批判 山本正之著 350

右翼的戦線統一の書簡にどう抗するかを探る力作ノ

総評 この闘わざる大組織 斎藤一郎著 290

相つづく闘争放棄と後退に今や組織の命運が問われるノ

同盟 総評に對抗する労働組織 350

労働組合研究会編ノ右翼的労働運動の原流を徹底分析

反戦青年委員会 高見圭司編著 350

新たな労働運動をめざしつつある「反戦」の発生史ノ

反戦青年労働者 福岡労働者反戦闘争委編 320

既成組織を超えようとする青年労働者のエネルギー

公害発生源労働者の告発 350

横山・小野木共著ノゼネラル石油精製労組の闘争報告

国鉄動力車 松崎明・谷恭介著 480

日本をゆるがせた25日間の闘いと反合闘争の新地平ノ

学生戦線

中島 誠著

290

全共闘とは何か。その組織原理と発生根拠を鋭く解明

全学連

中島誠編著

450

恐れる世代の思想と行動を内側から深くロングセラ

大学占拠の思想

秋田明大編

320

ついに消えない炎を構築した日大闘争の原理的発想

果てしなき進撃

東大全共闘編

290

連帯を求め孤立を恐れぬその闘いの実践的課題を語る

東大 大学紛争の原点

生越 忠著

290

制度の矛盾の告発から全大学の死と再生を探究する

時計台は高かった

大原紀美子著

290

東大闘争のさ中、権力の暴力と対峙しつつ綴る手記

人しれず微笑まん

樺 光子編

480

樺美智子遺稿集。日本の苦悩を自己の苦悩とした青春

友へ 樺美智子の手紙

樺 光子編

480

友への微笑みとして綴られ続けた樺さんの闘いの日々

反戦派高校生

竹内静子著

320

自立した高校生運動は可能か、その思想と行動を切開

高校生は反逆する

平栗清司編

320

全国三十数校の高校生により書かれた闘う答辞を結果

工業高校 その闘いと教育の本質

佐藤 誠著

320

「教師」としての自己を問いつめ闘った葛西工高報告

伝習館・自立闘争宣言

伝習館救済会編

480

樽川伝習館における。偏向処分三教師の闘いを報告

伝習館・教育主体の構造

伝習館救済会編

480

伝習館救済会編。伝習館闘争を支えた教育実践の論理

大学

伊多波重義・西田正夫編

350

危機の根源を掘り下げた新しい大学の構想を展望

戯歌番外地

野次馬旅団編

320

学生運動ざれ歌を拾い集めた。戯歌にみる学生運動

過激派壊滅作戦

滝川 洋著

450

公安警察の実態と日常活動を公安記者が克明に取材す

経済学入門

上・下 長洲一二他著

480

危機をなむ現代の資本主義の経済法則を平易に解説

日本経済入門

中村秀一郎編

290

二十数年、激変を重ねた日本経済の発展過程を分析

現代経済の見方・考え方

森田桐郎著

260

最低これだけはという経済学学習の初歩を明解に手引

貿易の内幕

森井 清著

320

複雑なメカニズムの裏に暗躍する悪徳商人たちの実態

これからの日本経済

平和経済計画

230

高度成長経済の功罪を総括し。日本経済の将来を展望

日本経済をどうするか

高橋正雄他著

250

高度成長と不況のイタチごっこをどう断ち切れるのか

国土総合開発の経済学

飯田清悦郎著

390

住みにくい・生きにくい。経済大国の仕組みをあばく

軍国主義と日本経済

木川田栄著

350

四次防を軸とした軍需産業の急成長と日本経済の変容

反戦派高校生

竹内静子著

320

自立した高校生運動は可能か、その思想と行動を切開

高校生は反逆する

平栗清司編

320

全国三十数校の高校生により書かれた闘う答辞を結果

工業高校 その闘いと教育の本質

佐藤 誠著

320

「教師」としての自己を問いつめ闘った葛西工高報告

伝習館・自立闘争宣言

伝習館救済会編

480

樽川伝習館における。偏向処分三教師の闘いを報告

伝習館・教育主体の構造

伝習館救済会編

480

伝習館救済会編。伝習館闘争を支えた教育実践の論理

大学

伊多波重義・西田正夫編

350

危機の根源を掘り下げた新しい大学の構想を展望

戯歌番外地

野次馬旅団編

320

学生運動ざれ歌を拾い集めた。戯歌にみる学生運動

過激派壊滅作戦

滝川 洋著

450

公安警察の実態と日常活動を公安記者が克明に取材す

「石油戦争」と日本経済

宮嶋信夫著

420

石油をもとめ沸騰する世界石油資本と日本経済の現実

日本の防衛産業

赤城正一著

320

日本で一番もうかる商売。それこそ防衛産業である

日本の産業王国

鈴木均・大野力共著

300

12企業都市の興亡に現代の歪みを追う。新地方都市論

日本の鉄鋼資本

飯田清悦郎著

320

日本の屋台骨と豪語する鉄鋼資本の意外な内幕を暴く

鉄鋼帝国の神話

佐木隆三著

320

鉄鋼労働者の現状報告が、70年代の合理化攻撃を示唆

新日鉄の底辺から

深田俊祐著

350

新日鉄それは下請け労働者の血と汗による繁栄の虚像

銀行合併の現場から

大西公哉著

320

「金融再編成」のあわただしい動きの実態を現場から

外資のなかのニッポン

内橋克人著

290

外資会社。の日常とその中の日本人社員の姿を追う

西部劇

増淵 健著

450

豊富な写真を交えて語りつくすファン待望の西部劇論

雑学としてアメリカ

皆河宗一著

390

歴史、民俗、文学、風俗、文化のなかのエピソード

アメリカ・フォークソング55話

皆河宗一著／フォークソングに見るアメリカ民衆史

350

アメリカ・プロ野球史

鈴木武樹著

390

スポーツビジネスの夢を実現したその歴史過程を追う

批判的・日本プロ野球史

鈴木武樹著

390

スポーツ企業の問題点を鋭く指摘し、その再生を展望

増補 武道の理論

南郷継正著

420

勝負論・上達論を弁証法を駆使して展開する異色作!

さかな歳時記

秋谷重男著

260

釣りの風物詩から魚の経済学まで楽しいさかなづくめ

ラジカル・アメリカ

砂田一郎著

320

噴出するアメリカ反既成世代の鮮烈な行動と思想情況

現代ジャーナリズム論

鈴木 均著

350

TVから社内報まで。自らの体験で掘んだ報道の論理

ジャーナリストに何が可能か

鈴木 均著

350

戦争体験とジャーナリズムのかかわりを徹底追究する

現代雑誌論

清水哲男著

390

氾濫する雑誌をめぐるその世界を解剖する新雑誌論

スポーツ・ジャーナリズム

清水哲男著

350

現代人の瞬時的関心を報道するそのバイタリティ源は

ドキュメント 悪女

小沢信男著

350

マスコミを騒がせたヒロイン達の姿に民衆の貌をみる

ドキュメント 犯罪の主役たち

小沢信男著

290

うち棄てられた風俗犯罪の底に現代社会の病根を抉る

蒸発

鎌田忠良著

260

人生模様の奥に潜む現代人の暗い欲望と不安を衝く!

殺人者の意思

鎌田忠良著

390

横須賀線爆破事件と連続射殺事件を軸に分析する殺意